

MATSU DOING 2050

わたしがつくる！
まつどのみらい

[かわら版] #1



第1回まちづくりワークショップが 開催されました！



[https://
www.facebook.com/
MATSUDOING2050/](https://www.facebook.com/MATSUDOING2050/)



記念すべき第1回目のワークショップが開催されました。「まつど全体の将来像について考える(こんなまちになったらいいな)」というテーマの元、一般公募の市民や学生の方々と市役所若手職員が活発な議論を行いました。

日時=2019年8月31日13時30分-16時55分

会場=松戸商工会議所大会議室

参加者=63名

西村幸夫 | にしむら ゆきお
神戸芸術工科大学教授

横張真 | よこはりまこと
東京大学大学院工学系研究科教授

宮城俊作 | みやぎしゅんさく
東京大学大学院工学系研究科教授

横張真氏による 趣旨説明



まず今回のWSのコンダクターを務める横張真先生から趣旨説明がありました。高齢化率が高まり「住みたくないまち」ランキング7位の松戸がどうすれば伸びしろを伸ばせるのか。従来の意思決定の

流れとは異なる、新しいワークショップを成功させるためにはどうするか、以下の4つのポイントが示されました。

- (1) まちをどう「つくる」かを考える。
- (2) 「30年後」のまちを考える。
- (3) 「建設的」に考える。
- (4) 役職や地位にとらわれず「対等」な立場で考える。

西村幸夫氏による 基調講演



続いてゲストである神戸芸術工科大学の西村幸夫先生から「歩きながら松戸の構造を考える」と題したレクチャーがありました。今回のWSは30年後を考えるが、そもそも現在の松戸も過去の人々のその時代ごとの判断で作られてきたことから、明治時代から現在に至るまでの松戸の歴史を、各時代の地図で現在の様子を見比べながら辿ります。

- (1) 江戸時代の松戸は宿場町であった。
- (2) 明治時代になり郵便局や市役所、鉄道駅など近代的な施設を建てなければならなかった時に、城下町では武家屋敷がそれらの敷地に置き換わっていったが宿場町ではそれらを造る、空き

地がない。

(3) 旧水戸街道沿いには空き地がないので、裏側に施設を作った経緯がある。松戸の過去を知ることで、私たちが進む未来を考えるという姿勢が共有されました。今回のワークショップのテーマは「まつど全体の将来像について考える(こんなまちになったらいいな)」です。

1. グループワーク [1]

いよいよワークショップ開始です。10名ずつ8グループに分かれて「まつどの強みや弱み」をテーマにまちの将来像について議論しました。

2. ディスカッション

2グループに別れてグループワークでまとめた「まちの将来像」について横張先生と宮城先生がファシリテーターとなりディスカッションを行いました。

3. グループワーク [2]

最後に、もう一度グループに戻って
↓ キャッチコピーを作成しました



[キャッチコピー発表]

※WSでの案をもとに一部表記を統一しています

1班

みんながつながり 主役になれるまち

松戸は特徴がないと言われるが、だからこそみんなが繋がって主役になれる。みんなには人間だけでなく自然も含まれる。主役とは、自主的に考える、行動する、責任をもつ事。次に繋げ、実現していくイメージを表現した。

2班

人の笑顔が見えるまち

アートや音楽活動など、自由な自己表現ができるまち。自然が豊か、個人事業主が増え、人の顔が見える、イベントが街中で溢れ活気があるまち。何不自由ないまちが素晴らしい、若い人も住み続けたい、普通の生活が今後も続いて欲しい。

3班

帰るとホッとするまち まつど

自分の居場所があり、人との繋がり、文化との繋がり、緑豊かなまち。多世代が主体。近隣市とは違う二番煎じではなくオンリーワンなまちに。商業系、賑わいよりも、住んでいる人が帰るとほっとするようなまち。

4班

「みこし」がつなげる あかるいまつど

お神輿を祭りで担ぎたいけれど、若い人が担いでくれない、ほかの地域から連れてきている現状を打開して地元で世代交代して神輿をかつぐ。「みこし=見越



し] 将来を見越して行動するという意味と、「神輿=自然の象徴」として自然を大切にというメッセージを込めて「みこし」という言葉を選んだ。

5班

文化でつながるまつど、 点から線へ、そして面へ ～ひと・まち・こころの ネットワーク～

文化の重要性、アーティストがたくさん集まるまち。歴史を重んじ、過去と繋がっていくまちを表現した。

6班

求めるものが そろうまち松戸

駅前のチェーン店で一時的な欲求が揃うまちではなく、みんなが求めるものが揃うまち。文化の拠点があり、子どもが遊べ、高齢者の居場所がある多層的なまちへ。

7班

誰もが余白に 描きこめるまち

松戸市民はもちろん、外から来る人がやりたいことがなんでもできる。松戸はほかのまちに誇れるものがない分、やりたいことがなんでもできる。歴史を楽しみたい人、文化を楽しみたい人、誰が来て

も松戸市でいろんなことができる。

8班

極上のやど MATSUDO

オープンで包容力がある宿場町として栄えてきた松戸をイメージした。国際的なまちになりたいので英語で表現した。歴史を観光資源にしたい。駅を降り立って、高級感のある美しい玄関、まちの人からおもてなし。松戸に来てよかった、帰りたくないと思える極上のやどのようなまち。



宮城先生まとめコメント

非常に多様なキャッチフレーズは松戸の持っている多様性を表している。まちの空間と人の心に余裕があると感じている。まちづくりはエンドレスに続くトラック競技のようなものであり、平成に先を走っていたまちが気付くと松戸のすぐ後に他のまちが来ている状態だが追い越すことができない。気付いたら松戸が先頭を走っていることが起こり得る期待感を感じた。

横張先生コメント

皆さんの議論を見てこれはいける!と思った。わかりやすさを求める社会で今日のキャッチコピーを見て成熟した言葉を感じた。WSのなかで「私はすぐいなくなるのでは」という声も聞かれたが、松戸に住んでいたこともあり家族も住んでおり一生松戸に関わるつもりである。皆さんもぜひ6回のWSの先も関わって頂きたい。「結局箱をつくるのか」という言葉も聞かれたが「つくる」には社会の仕組みをつくることも含まれる。箱モノだけをつくるのではないと考えて頂きたい。

次回は10月12日(土)

13:30-17:00

松戸衛生会館3階で
開催します。

